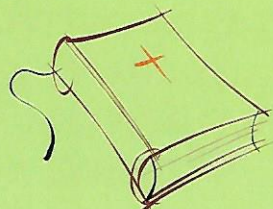
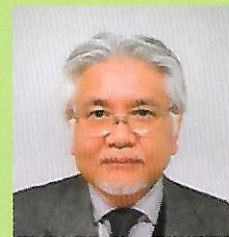


# MB 伝道ニュース



## 開拓伝道のビジョンを語る【8】



徳本 篤師:CEM編集委員

(千里キリスト教会)

### 開拓伝道は教会が追い続けてきた夢

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒の働き1章8節)

「地の果て」とは、地球の極限地域よりも全世界に散在する「未伝地」を指しています。「未伝地」とは、世界中の「他民族、他部族、他言語」の人々のみを指すのではなく、身近に存在する「他都市、他村落、他世代、他宗教」の人々のことも含んでいます。それぞれの地に出て行って、そこに住む人々にキリストの福音を宣べ伝えあかすことは、使徒の時代から、主に忠実な聖徒たちが追い続けてきた「夢」でした。「夢」というのは、それは果たし終えるという時がなく、いつまでも未完成であることです。さらに「夢」というのは、それを失った群れがやがて滅びていく特徴を持っていることを思い起こさせるからです。

私が三十代の頃に、奈良県北部の丘陵地帯が開拓されて「学研都市」というニュータウンが建設されることが話題になりました。子どもたちがまだ就学前でしたので、家内と子どもを連れてその地域を幾度となく巡り歩きました。何も知らない子どもたちはそこに行くことを喜んでいましたが、私と家内は「開拓伝道」の夢をともに祈り、語り合いました。主が道を開いてくださるなら、私たちにも開拓伝道の夢を叶えさせていただきたいと願っていました。その当時私は、夢を実現するためには三つの器が必要であると考えていました。それは、出ていくために「戦力」と「戦術」と「戦略」を準備することです。まず「戦力」のために、二つのことを求めました。一つは、霊的な備えとして主からの明確な召命と権威を与えられることです。もう一つは、経済的に自立できるように職業(電気主任技師、自動制御設計など)に就くことでした。神学校を卒業して間がなく、まだ未熟で未経験な者でしたが、開拓伝道に向かうだけの体力と気力とチャレンジ精神にみなぎっていました。次に「戦術」のために、二つのことを求めました。その一つは個人伝道の熟練度を上げることです。そのための訓練と指導を求めました。もう一つは、実際に伝道地に住んで地域の人々のことをよく知り、人々の必要とするものの中から自分にできることを見つけ出す作業です。家内は「ピアノ教室」を開いて生徒の家族と親しくなれたらと言っていました。同じ教会・教団の信徒の方で「学研都市」の近くに住む家族との協力が得られるなら、さらに有力な「戦術」になると思いました。最後に「戦略」のために二つのことを求めました。その一つは、教団の開拓伝道計画と連携することです。開拓場所の承認や、開拓で生まれる群れの継続的な支援がなければ、ただ独りの働き人だけではいつまでも働きを継続することはできません。継続できなければやがて消滅していくでしょう。それでも開拓するつもりなのか、と問われたら引き下がってしまうかも知れません。もう一つは、教団、地域教会との戦略的なネットワークです。経済的な支援だけでなく、祈りと情報だけでなく、協力者のネットワークを構築することです。実践的なチームワークによって開拓伝道に取り組むことです。私は献身する前に関西の電力関係の職場で働いていました。常時安定した電力エネルギーを供給できるように、各地域の送電施設が機能的なネットワークで結ばれています。開拓伝道にもこれと同じ原理が必要です。



私は間もなく七十歳に手が届く年齢になりました。三十代の時は道が開かれず、自分には叶えることができなかつた夢を思い起こしています。いま開拓伝道のために主の導きを祈っておられる方々の中から、さらに夢に向かって立ち上がる人が起こされることを願っています。その人を心から応援したいです。

## 「家の教会」シリーズ#2



栗田学師:中学生キャンプ長  
(尼崎キリスト教会)

今回、私がかの教会という取り組みを通して与えられた恵みについて紹介させていただきます。私は2012年10月に招待キリスト教会で行われているセミナーに夫婦で参加させていただきました。セミナーでは、「いのちの道」という聖書を体系的に学ぶことができる学びを提供してくださいました。自分が信じているものが何であるのかを整理できる素晴らしい学びだと思いました。また、招待教会に行かせていただいた時、そこでまず感じたのは、信徒の方が、生き生きとして喜んで奉仕しておられたことでした。私たち夫婦は、セミナーの4泊5日という期間中は、日本人の夫と、中国人の奥さんの家に泊まらせていただきました。そして土曜日の夜にしている牧場(家を開放した小グループ)に参加させていただきました。みんな一品ずつ持ってきて、一緒にご飯を楽しく食べます。その後、分かち合いの時を持ちました。1人ノンクリスチャンで聖書の学びを受けておられる最中の方もおられました。その方は、自分の今の問題を涙ながらに話しておられました。私も話しましたが、思ったのは、このように自分の話を真剣に聞いてもらえる場所はなかなかないなということでした。社会人の時は、居酒屋に集まって会社や上司のぐちとかを言うことはありましたが、そのような愚痴や不満ではなくて、自分のそのままの話(弱さも含めて)を出せる場所、聞いてもらえる場所というのはなかなかないと思いました。私たちを受け入れてくださっていた夫妻は、マンションに住んでおられたのですが、「このマンションの中からどうやってこの牧場に来てもらえるのか」という、ご自分のビジョンを話してくださいました。自分も主の宣教の働きの一環を担っているという思いを熱く持っておられたのが印象的で驚きました。私は、「毎週、このようなことをしてしんどくないのですか」と聞くと、「しんどさはない。もう、それが生活の一部となっている」と言っておられました。「しんどかったのは、人数が増えてきて群れを分けた時にしばらくは辛かった」と言っておられました。そこまでの親密な交わりと関係になるのかと思いました。それから、このセミナーは食事も、宿泊も、講義もあったのに、無料でした。先生も信徒の方も日本の宣教は家の教会しかないと確信しておられ、その熱意が伝わってきました。

尼崎キリスト教会でも、2014年4月からのいのちの道を提供することができ、9月からは牧場の交わりをスタートすることができました。その交わりには、ほとんどの時にノンクリスチャンが来られています。共に食事をし、笑い合い、関係を築く場所となり、クリスチャンの生き方を見てもらい、祈りの力を体験する場所となってきたと思います。礼拝にお見えになるノンクリスチャンの方は、意外と誘えば来てくださることが多いです。一度でも来られたら関係が深まります。日本では、親しい人しか家に招いて食事するというとはしないと思いますので、家に招かれくつろぐ時に、心が開かれていくのだなと感じます。現在、4つのグループがあり、それぞれに牧者と呼ばれる信徒リーダーがいます。家の教会を通して恵みを与えてくださっている主に感謝します。また、家を開放して下さっている牧者に感謝します。そして、産後、子どもがまだ小さい中でも、家を開けてくれている妻に感謝します。

\*編集後記\*

☆皆様のご意見ご感想をお待ちしております。



発行:日本メノナイトブレザレン教団 伝道委員会

〒563-0038 大阪府池田市荘園2丁目1-12 TEL:072-762-5731

発行者:田畑雅紀(伝道委員長)

編集者:河野和雄(広報担当)